

次ページへ続く

Continued on next page...

# 翻刻・轍士編『墨流し わだち第五』

雲 英 末 雄

本翻刻の底本に用いた「墨流し」は、富山県立図書館中島文庫の蔵本で、今までその存在の知られていなかった轍士編元禄七年刊の俳書である。本書の翻刻許可を同図書館にお願したところ、幸いに快諾を得られたので、以下「書誌」「解題」を付して翻刻したいと思う。

## 書誌

底本 富山県立図書館中島文庫蔵本。  
書型 半紙本。一冊。袋綴。  
表紙 原裝、縹色無文様表紙。縦二二・三糎×横一六・二糎。  
題簽 原題簽、中央無辺「黒流し わたち 第五」  
匡郭 なし。  
柱刻「墨 一（〜三十九）」。  
丁数 三十九丁。  
序文 なし。

跋文 なし。

刊記 「元禄七<sup>甲</sup>年孟春／井筒屋庄兵衛板」。

印記 「杏文庫本」「富山県立図書館蔵書昭和五九年八月二四日」とあり。

備考 表表紙見返しに「塩屋半右衛門」と墨書。

## 解題

元禄十五年、三都や諸国の俳人を遊女の位に見立てて評判した「花見車」が刊行された。それは匿名で出されているが、轍士の著述であることは反駁書「鳴弦之書」により明らかである。その「花見車」で轍士はみづからを「太夫」の位に据えて、

大坂西山やのかぶる（宗因弟子也）成しが、酒もなり、手もりちぎにかゝれ、ゑくぼがしほらしさに、京へつき出し君也。はつぶみ（はつぶみは三物）も客衆あまた見えたり。つとめにくきみやこにながら

へていさんすは、一座もよく心中（心中は連中に無心いはぬ）のよきゆへ也。入ぼくろ（入ぼくろは懐紙也）もよふさゝんす。風俗も江戸に似てはりもつよく、道中もよいほどに、むさしへといふ人もあれど、地によき大臣があるゆへかぶりふつていさんす。紋日にもよく出らるれば、今の世のはやり太夫ときこゆ。

やね葺や小哥もならずほとゝぎす

と最大限に自画自讃し、ついでその編著を、

○我庵 世のため わだち 白眼 後瀬山 尾山集 糸屑 此日 七車 葵車 苺 元禄拾遺 自在講

と十三点ほど挙げてゐる。このうち現在が確認できるものは、『我が庵』（元禄四年七月自序）、『誹諧白眼わだち第二』（元禄五年七月序）、『誹諧糸屑』（元禄七年夏跋）、『誹諧此日』（元禄七年四月奥）、『元禄拾遺』（元禄九年正月自序）の五点であつたが、今年に入つて『葵車』（元禄十年梅雨奥）と、本書『墨流し』（元禄七年孟春刊）の二書を加えうることができたのは幸いである。

『墨流し』は、題簽に「わだち第五」と明記されるように、「わだち」（元禄五年刊が第一）、『誹諧白眼』（元禄五年七月序、第二）、『後瀬山』（第三）、『尾山集』（第四）につぐもので、これらはいずれも轍士が各地へ行脚したその成果を、一書としたものと考えることができ。轍士の旅については、わだち第二の『誹諧白眼』を中心に考察した拙稿「元禄俳人の旅」（元禄京都俳壇研究）勉強社 昭和60年刊）を参考にされたが、轍士がいずれの行脚においてもいち早くその成果を刊行している

のは、大いに注目に値しよう。本書も、またそうした行脚俳人轍士が、精力的にその旅の成果を一書に盛りこんだものである。

まず書名の「墨流し」は、本書二丁表、冒頭に「越の福井愛宕山眺望」と前書して轍士の六吟歌仙の発句「雲月の所がら也墨流し」（傍点筆者、以下同じ）が載るように、福井の名産「墨流し」によるものであろう。越前福井は、和紙の中でも色紙や短冊に用いられる特殊な墨流しの技法で古くから知られていた。西鶴の『男色大鑑』（貞享四年刊）巻四の二には「近日越前へのたよりに、墨流し、幅広の鳥子三十枚、御申遣し頼入候」などとあつて、右の傍証となろう。これより越前の名産を書名とし、その旅の成果を示そうとしたことが、はつきりしよう。

ちなみに「わだち第三」の『後瀬山のちのせやま』は、若狭国の歌枕で、今の小浜市南方の城山のことであるという（片桐洋一「歌枕歌ことば辞典」角川書店 昭和58年刊）。また第四の『尾山集』の「尾山」は、本書『墨流し』の七丁表に、「昼のほどに金沢に入。此所の吟は尾山集に書付け」とあるから、金沢の付近の山の名と思われる。

本書によると、轍士の行脚のコースは、越前・越中・加賀・能登にわたっているが、もう少し詳しくたどると以下のごとくである。

元禄六年七月下旬、京を出発し、やがて福井に着き、そこで六吟歌仙興行。ついで可郷（等越）を訪問。可郷とともに黒丸の碑を見物。頼康に親鸞上人の遺跡を見、金津に至り、そこで八月十四日の月を見る。十五日、蓮の浦・細呂木を経て、これより加賀に入り、長峯をゆく。さらに大将持、小松を過ぎて寺井に宿るが、十五夜の月が美しいので、深更

に出発。十六日昼、金沢に入る。金沢から俱利伽羅峠、卯の花山、木の葉山を見物して、名のみ残る砥波の関を通り、殖生の八幡宮を拝参す。そこに石動の宇白が迎えて、そこでしばらく日を送る。本覚山宝幢院

で歌仙興行。そこからさらに能登の方向に向かい、二上山、恋の山を経、有磯、岩瀬などを通り、義経雨晴しの岩を見る。夕刻、水見に着き宿泊。唐島を見る。さらにあら山を越えて、七尾に到着。そこで歌仙二巻を諸

俳人と興行。七尾に滞在中に眼をわずらい、宿の息純章にねんごろに介抱され、ようやく平癒し、純章は気多明神までしたってくる。ついで子浦から金沢に出、さらに福井でとどめられ、十月朔日となる。

以上が轍士の行脚のコースであるが、各地で連句の興行を行なっており、それを示せば以下のとおりである。

①福井 発句、轍士。連衆、洞白・志吟・安部・以笑・大野糸柳（六

吟歌仙）

②石動 発句、轍士。連衆、宇白・芦葉・吟雪（四吟歌仙）

③同 本覚山宝幢院 発句、轍士。連衆、秋湖・専之・芦葉・宇白・

吟雪（六吟半歌仙）

④能登七尾 発句、轍士。連衆、堤要・勤文・探吟・聿貞・友之（六

吟歌仙）

⑤同友之興行 発句、聿貞。連衆、轍士・堤要・友之・勤文（五吟

歌仙）

⑥福井 発句、轍士。連衆、洞白・可郷・元春・黒人・祐元（六吟

歌仙）

⑦福井の大橋 発句、轍士。連衆、時習・一ろ・乍之・元春・以志・旧鶯・志吟・元身・楽助（十吟歌仙）

⑧福井、常定興行 発句、轍士。連衆、常定・以志・洞白・元春・豊子・中意・安部（八吟歌仙）

なお二十七丁裏から三十四丁表まで、福井・越中・金沢・小松・松任などの諸俳人の四季発句を収録。

以上が本書の主要な部分であるが、これらの稿が成ったのち、井波の浪化上人から書簡が届き、その書簡の内容を、二十四丁裏から三十九丁裏までに追加のかたちで載せている。轍士はこの旅の途次、越中井波に浪化上人を訪ねたが、上洛中で逢えず、やむなく前書を添えて「君きけや御里近く秋を三夜」の発句を残してきた。それに対して浪化上人は、其継・夕鳥・嵐青・嵐秋・仙志・芦風・紫堂らと脇以下を継いで歌仙一卷として返送された。その歌仙一卷と、端物が本書の追加のようにして載せられているのである。

本書の内容の大略を示したが、本書の中に登場する俳人たちのグループで、とりわけ轍士と密接な交流を行なうのは、福井と七尾の俳人たちである。

まず福井では何といっても、可郷（等裁）の存在は重要である。可郷は芭蕉の「おくのほそ道」でも、福井の条に「古き隠士」として登場する等裁であるが、本書でも、

越の可郷はすこぶる好士なりしが、老年まで徳を隠して市の傍に閑居す。秋雨の寂しからんと、芦の戸をたゝひて

黍分る居士が舎りの夕哉

と描かれている。「おくのほそ道」ほどの表現ではないが、その隠棲の様子には類似が見られて興味深い。可郷は「新統犬筑波集」(季吟編・方治三年自序)で句引に「可卿フキ 福井 五句」として入集しており、古くからの貞門俳人で、福井俳壇で重きをなしていたものと思われる。なお雲鈴の「入日記」によると、元禄十三年雲鈴が北陸行脚をしたころ、すでに等裁は故人であったという(『俳諧大辞典』)。ついで祐元・一慶の両名も、前引「新統犬筑波」に九句、二句と入集する貞門俳人である。石川銀栄子編「越前俳諧誌提要」(福井県郷土誌懇談会 昭和39年刊)によれば、祐元は、

祐元 福井多田氏。(統連珠)

遠山や心のあゆむ花見ふね 東西夜話とあり、一慶は、

一慶 福井(東西夜話・山中集)

紅葉より桜に角を落す鹿 玉まつりとある。他に祐子・以志・一声

も、それぞれ

祐子 福井(玉まつり・草刈笛・夜話くるひ・霜のひかり)

春雨や反古さらえの恋無常 東西夜話

以志 福井(夜話くるひ)

鯉鮎喰ふ春の名たての余寒哉 白陀羅尼

一声 福井(玉江草)

と載っている。

なお会所本「気比のうみ」(元禄五年仲秋望日序)に、本書に入集す

る、底石・安都・祐元・一慶らの福井俳人が名を出しているのは、大いに注目する必要がある。

能登七尾の俳人の中では提要と勤文の二人が中心的存在である。提要は伊藤信徳門。菊池氏。涼風軒。編著に「能登釜」(半紙本二冊。元禄十二衣更着中鳳下童言水序。自序。元禄十二己卯年中春下旬応々翁方山跋。吟花堂晚山跋。みづ、屋庄兵衛板)がある。また「北の箱」(方山編・元禄十二年初冬中旬自序)「棒炭」(長久編・元禄十三年三月跋)等に入集。勤文は伊藤信徳門。勝木氏。余力堂。「卯辰集」(北枝編・元禄四年四月奥)あたりから諸書に入集し、元禄十三年大野長久とともに上京し、「珠洲之海」(半紙本三冊。元禄十三年三月洛下言水序。自序。元禄十三年三月洛下吟花堂晚山跋。井筒屋庄兵衛板)を刊行。他に聿貞は「能登釜」に「勝木 聿貞」として入集するから、勤文と一族の人物と思われる。

その他の地方では石動の宇白は、俳諧活動が盛んで、「卯辰集」以下諸書に入集し、小松の塵生、金沢の句空、北枝など著名俳人も入集しているが、それらについては省略する。井波では浪化を中心に其継・夕鳥・嵐青・嵐秋・仙志・芦風・紫堂らが一座しているが、これらの俳人の動向については和田徳一著「越中俳諧史―芭蕉・浪化とその遺風―」(桜楓社 昭和56年刊)に詳しいので、それを参照されたい。

最後に本書によって、轍士の大坂より京都への移住の時期が推定されるので、それについて触れておきたい。水田紀久氏「花見草」の価値と轍士の俳歴」(『連歌俳諧研究』五 昭和28年10月)によると、轍士は元

禄六年の秋までに大坂から京都に転居したかとされている。元禄五年五

月の奥書を有する「誹諧白眼」には、言水の錢別吟の詞書に「梅は浪花

の家に置いて心かるきは行脚の様、あやしや扉たゞくは轍士、出るは我」

とあり、この時点で轍士は大坂に在住していたことが証せられる。とこ

ろで本書「墨流し」の冒頭に「壬申の冬塞に越きたれど、雪しぶきにお

それ帰り、蔽一坊に履を解て年を暮、癸酉の芳一時は伊勢のかたに吟遊

し。夏の空はくるしみて洛におこたり云々」とあり、壬申は元禄五年、

癸酉は同六年を指すから、この文の流れからすると壬申の冬にはすでに

京都への移住が済んでいたかのごとき感じを受ける。したがって轍士の

大坂より京都への移住は元禄五年五月から冬まで間に行なわれたのでは

ないかと推定できよう。

右のごとく本書「墨流し」は、轍士の京都への移住の時期をも考える

手がかりを与えてくれている。

以上簡略ながら本書の解題を述べた。なお翻刻に際しては、以下のご

とき要領に基づいて行なった。

一、漢字および仮名の表記は、できうる限り現行のものに改めた。

一、仮名遣い、濁点等は、すべて原本通りにした。

一、裏移りを「丁移り」で以て示し、丁数を数字、その表・裏をオ・

ウで記した。

解題の筆をおくにあたり、本書の翻刻を御許可下さった富山県立図書館、ならびに種々お世話いただいた整理課長太田久夫氏に深謝申し上げ

ます。

### 墨流し わたち第五（題箋）

壬申の冬塞に越きたれと

雪しふきにおそれ帰り蔽一坊

に履を解て年を暮癸酉の

芳一時は伊勢のかたに吟遊し

夏の空はくるしみて洛におこ

たり桐一葉風涼しく成て筇を

うこかす漸文月も終りに

京童のおとりも名残也とて

晝かけて声を咽す我はまた

旅すかた檜笠端ふかく引かふり

輪一屯押分なから一くさりこゑ

を合せみやこの余波をうち紛

れて立出る

されは此頭陀おとりとも

はやされむ

越の福居愛宕山眺望

雲月の所から也墨流し

轍士

「（二オ）

「（二ウ）

惜くすたれて稻かゝる松

洞白

心よふ小鷹帰りに腕に手に

志吟

湯を乞よりてさし覗く窓

安部

雷公のたゝ光らすと鳴よかし

以笑

子の寐かへりをたゝきつけゝり

大野  
糸柳 (二オ)

余念なくうちしこりたるよみかるた

白

茶碗に入る油わひしき

士

替馬の馬に粥飼六地藏

部

柱杖に消る浅茅生の霜

吟

もの読ぬ間は寒下に気を伸て

柳

うち黒みたる厂の人つら

笑

夕寒み浴室にはしる丸裸

士

夢一想の会を月に誘はれ

白

賛はこふ筥に露の色清き

吟

古きあふきを拾はせにけり

部

はつ花や人珍らしきかくれ咲

笑

鐘一木の音を奪ふ東風風

柳

野はつれに雉の臥たる形そよき

白

引張合て舟の恋衣

士

帯広く比丘尼は尻を撫すとも

部

美くしや峯やはらかにのほる月

柳

薄に鶯を繋ぎ下たる

笑

うかめとて井戸に打こむ石仏

士

世のさかなきに国を住かへ

白

去君の似たるも床し曾波

吟

まくら重なる吉はらの夢

部

綻ひし紙小の綿の古からす

笑

黒木に替る酒の味はひ

柳

明くれは心にそまぬ念仏して

白

撰り残さるゝ花の留主守

士

春の風廁の檜目戸ならす音

吟

此長閑さに地虫釣也

笑

弁当の明食つきに拾ふ貝

柳

轍伝ふて鳥のはらく

部

越の可郷はきこふる好士なり

(四オ)

しか老年まで徳を隠し

て市の傍に閑居ス秋雨の

寂しからんと草の戸を

たゝひて

黍分る居士か舎りの夕哉

雪ふかくならんほと又こそ立

帰らんと各にいとま乞て出ル

草鞋も跡芳しやことし葉

立帰れせめて名残の月の比

叟なを名残を、しみて送出る

袖つれて古跡を尋ぬ

黒丸の碑に

新田義貞此所戦死

裏二 曆応元年閏七月二日

とあり

蟻郷の羽ひろけ、り塚の上

舟はしうちわたりて頼康と

いふ所は親鸞聖人の楊枝を

さし置れたる所也とて人家有

親鸞の喰こほされし稻穂哉

かくかたらひ行ほとに金津に日を

くれぬ叟か門人芳久館に尋入る

あるし心さしあつく塵うち払ひ

唐にしきの儲けをなしてこと更

今日は小望月あすの夜をこよひに

なしてなとおもふ月のさやかなり

とて盃くみかはして語る

旅の宿を留主つかへ迎秋の月

哥の真似せし鄙の虫の音

可郷

安之(四ウ)

結柴の陰より鹿の首出して

鳥しきる迄物かたりして臥ぬ明れ

は十五日やかてと云わかれて立出る蓮の浦

は名寄などにも加賀の部に入たれと

細呂木は加賀越前の堺也細呂木よ

りは遙かにこなたなれば越前の中也蓮

村とて民家有入江にして涼しき景色也

細呂木を限りて加賀の方長峯と

いふを通る三國うらの船士吹放されし

に此長峯を目にあて、帰帆しけるか

女護の島より海上二百五十程なりと語る

霧浪や島の女御の立すかた

竹の浦 小塩の浦 塩越などは遙かに

浜辺に見おろして過る大將持

小松過て寺井に行くれ宿をかる

月ことにさやかなれはあるしをかたら

ひ酒なとたうへけるあるし名月と

いふ事を知らす秋の月のめてたき

を古哥なと書付て見する

名月の講尺したるとまり哉

いひなくさむへきやうもなければ宵

よりうち臥ぬ余に月の面白さに

和休

「(五オ)

「(六オ)

「(六ウ)

轍士  
芳久(五ウ)

夜ふかく立出る心を友にたどる  
ほとに人こひしうこそ物うけれ

いひ出る人や誰く月の泉

昼のほとに金沢に入此所の吟は

尾山集に書付ける

中の越は名所もあまたなれば

心いそきして杖を馬にす俱利

伽羅峠より先左右に卯の花山

木の葉山を見わたし砥波の関は

名のみして関屋もなし殖生の

八幡宮高く拝まれ玉ひていと

たうとし今石動車羅堂宇白

出むかひていさなはれしはらく日を

送る

秋也けり砥波卯の花昔の山

風のうるさく送る稲の香

月の前朽たる桶の底入て

崎ゆかしけに若鶏のはね

俄客繕ひかねてしほ肴

帯をせぬ子の腹のふくらか

川下<sup>ウ</sup>にいつ流れたる居彫<sup>イカガ</sup>舟

昼の螢を今覚えけり

愛なきよ牛に喰<sup>ぐ</sup>する女郎花

野分催す雲のむらつき

干きらぬ中に衣のす秋のくれ

一里は月に忍ひ路の末

さし柳のゆかみを笠に気つかひて

濁る事なきふくろうの水

掃跡をまたふり埋む今朝の雪

酒食のいき洩る軒口

小鼓の乙をうち出す花の人

つゞけさまなる春の江戸詰

<sup>名</sup>寺くを拝みめぐりて涅槃像

自然にくほむ雨落の石

気をとめて涼む所を蚊の喰らひ

こけこむ閨のうき世御座哉

極を茶碗に詫し端つほね

頬も出されぬ風の吹出し

上るりを六段すます船の中

赤石も須<sup>ス</sup>に劣る事なし

飛鳥井の公も来ますや神祭

筵を張は占のこと

うかくとよはる思ひや二日月

述懐虫は何を述懐

士  
白 (八才)

葉

雪

士

白 (八ウ)

全

士

葉

白 (九才)

葉

雪

白

雪

ウ 就替る草鞋に簑の露落て

水のうつりは同じ穢多か火

俎板にせよとて舵をあてかはれ

笑ひ紛れて疲わするゝ

花の香の髪にとまれと引ほとき

年く棚をひろけたる藤

本覚山宝幢院は有かたき霊地

にて門にむかひて千年の御影

拝まれさせ給ふ方丈は山根に

造られて椎柴の露きらく

として竹一煙 松一霧の色まなこ

に広り真如実相の月もすみ

わたる端なるへし院主覚了い

また壮年にして蜩一雪 鑽一仰の

学に暇なくことに風雅の心

さしふかく表徳は秋湖旅ね

のつれくなる雨の夜まねか

れて寄スル吟

身にしむや草に音有草の露

月に拾はむ庭の茅栗

虫の篋心のまくに組かねて

雪

葉

士

白(九ウ)

葉

雪

ふすほる中に燃る鍋の火

筆握る詮方知たらは頼ふ欵

扇引して暮す五月雨

ものやみに此ころ色の青さめし

やらても結ふ文の両袖

振へとも実は落果し鶏頭花

ねくさくなりし坊の栗飯

待くて月の本意なし雨曇り

上手なりとてませぬ双六

悟らむと壁にむかへは達尸殿

地震ゆりこほす半銅の水

みたれちる鶏の子の数あらためて

あふら糟時畑のうねく

花の山のほり尽して左右にみむ

あたかな日や羽織脱かけ

車羅堂に日数へて浅からさる

心つかひともにて立出る余に名残

をしまれて男泣になき給ふそや

草鞋のはき苦しやな今朝の露

降てくれぬかしはし秋雨

なといひ別れて能登の方を

芦葉

宇白

吟雪

湖

士

葉

之(十一ウ)

雪

白

士

湖

之

葉

白(十一ウ)

宇白

心さして吟ふ立山は右に東に  
あたりて嶺<sup>ツツミ</sup>々たり道つるゝ

柴人の此山の不思議共語りて行」(十二オ)

おそろしや稻<sup>カ</sup>搗人も彼に似て

二上山は越中一の大社也と聞し

にたかひて華表も見えず山碑に

拝殿本社はかり幽かに残りて松

杉覆ひかゝり落―葉道を降埋

みて物寂し

況<sup>コトイ</sup>獅子の猶恐ろしや蔦かつら

窓の山は二上のつゝき也と聞

て尋ぬれとも定まらず只ちる

さく美しき山いくつもならひたり

恨みありかくまで露に恋の山

有磯 岩瀬は奈呉の浜につゝき

たり北の海ははてもなく煙水范々

として南の山岸に浪うちよせ

て人馬のかよひ路とも見えず只

漁人の足跡をたよりに行

秋の雨蹄を消すな奈古の浜

又かしこは道絶て海にわたり入  
て山をめくるに大なる巖洞有

「(十二ウ)

あまりにつよく降しふきて此洞

に入人もまねなる所にひとつの

樵夫来りて同しく雨を凌ぐ

此浦の名所ともねんころにおしゆ

今此洞は義経雨晴しの岩とて

むかし判官此沖に船かゝりし

てこの洞に雨をしのき玉ふと

かたる昔おほえてなつかしく

秋しくれ牛若殿の尻の跡

浜辺四里の高砂子をへて夕陽

に氷見に宿かる唐島は遙かに

沖に見えたり

唐島や月やいつれの山の端そ

あら山をうち越て能州七尾に入

此所こそ北の海は限る也ときく

古人も来る事まれなるにや

きこふる名所はなけれども景

色あまた所に有て魚鱗草に

まみれたり

初<sup>ツイ</sup>旅の厂も有らん北の海

霧のうこかす目しるしの星  
澄月に弓場の箭をうち消して

「(十三オ)

「(十三ウ)

轍<sup>ツ</sup>土」(十四オ)

提要

勤文

気は蝸牛の角なかりけり

酒呑て樽の陰に世を送り

吹こそまくれあら簑の風

呼れとも寐入てゐるかわたし守

流れくゝて五六歩の燭

下されし題は名に立富士の雪

宿申さむに頭陀かけた人

肩癖に灸のけふりくすほらせ

契余りて枕せぬ夜半

此文は千束の中の文の屑

蛛もねかひの糸かくる秋

夕月に茶釜ひとつを取まとい

大津絵に見る聖霊のふり

花匂ふ音羽の滝にたゝかれて

衣更着三日前之同行

討死の跡のあわれや春の霜

罔象コウゾウそなかき犬の化吠

八のはし一もとゆるせ杜若

能登に天狗の爪拾ふ山

大名はこんた噺をすかれける

したくゝと降る雨の雪隠

梟のあやなき声を聞とかめ

探吟

聿貞

友之

執筆

士

要】(十四ウ)

文

吟

貞

之

要

士

吟

文】(十五オ)

之

貞

要

文

吟

貞

之】(十五ウ)

身をもろともに月の水底

椎は局菊は内侍かさゝけもの

薄を結ふ有はらの寺

ひやくゝと足の上行青石龍子

黒髪覆ふ夢の蟲

恋させし讓の銀の惜かりき

他国から見る泥町の空

花やちる船の繩フナヅナ力添て

拍子にかゝり折よ蒲公

初雷ハツライや落て形のなき物を

五歳の春にいさむ竹馬

友之興行

つれたちて行たし月の都人

私はたゝ生た初鯉

代の栄え冑に菊の酒請て

日は何時そいかに面く

道迫し御免なれとて踏またき

さしつくはふて居たる大犬

作兵衛か名を改めて虎右衛門

辻傘にしやへる妙薬

三味線と衆生濟度ときけは聞

要

士

吟

文

之

貞

吟

士】(十六オ)

之

要

文

聿貞

轍士】(十六ウ)

提要

友之

勤文

貞

士

要

之

朱雀にぬける廿八日

文〔一七〇〕

婦にして悔しき主の独姫

貞

喧嘩のやうに飯をしいけり  
大路行座頭も花に一休み

士

足にはさみて出す鼻帯

士

昼まで霞む杉のむら立

文〔一七八〕

ものとは猫の折く旅枕

要

春の日を庄屋の棟のおさくし

文

掛菰そよく月の下窓

之

咄まきるゝ鳥の囀り

執筆

子をおもふ冬を隣に機織て

文

位牌は袖の露のたましい

貞

七尾に入て眼をいたみ浦くめくる  
事もなくうちこもりたりあるし

見上れは萱堂花の雲に透

士

の夫婦息純章昼夜枕もとに  
入かはりて看病にあふけふは

船にすゝりをならず臘夜

要〔一七ウ〕

重陽也とていつくにも菊折もち  
てことふきたれと酒は医師つ

名  
うれしけに重なり帰る浦の

之

よくいましめてゆるさず  
せめてさは目にぬすりけりけふの露

つし王丸の泣音なるらん

文

たすけられ浜辺に出る  
いなつまや山惜まれて一目宛

きついで人ときげと智恵有和尚也

貞

漸に平愈して立帰るあるし  
余波をしたひて気多明神の

〔一九ウ〕

ひとつの巻物は味曾塩の法

士

智門まで見送り出  
ましてはし秋の雨来る国の雲

冠も着たければ着る里住ゐ

要

泣別れて此夜は子浦と云所わひ

狐のあるゝともし火の陰

之

純章

飲すとして薬で直る煩か

文

〔一九ウ〕

祈る貴船に銭とられほす

貞〔一八オ〕

俤やつほ口までも古にしり

士

兄の敵と杖にうつ石

要

行先や世上の月を跡になし

之

出狂寒さうに野分塩風

文

ウ  
秋祭名もなき神の御戸開

貞

〔一九ウ〕

しき宿に臥て金沢に出各に強

とめられたれと白根ははや雪に

埋みて山もなし又こそと立帰ル

福居に引とめられ又日を経る程

に神なかり月朔日のけふに成ぬ

帰去来今火燐昼の沙汰す也

今年の雪は遅かろと思ふ

桜見しそのほとをりの身に添て

はなしの余る日の長さ哉

隴夜の月は出そうて出もやらす

水を咽みてかける田鴉

湊江や松風落てゆふる船

若衆つれたる観音の坊

明くれを浴所にうらみ泣

美面さへよくは腹はかりもの

此秋は風雅に捨る菊の晝

草鞋とかめにぬする露草

預けて月にかり枕

目のたけほとは土の物見む

頼みなき主にいとまをまいらせて

山有川有嵯峨のつれく

石たたく雨に流るゝ花の雲

小蛇も龍となれる若草

名 春夕撞ものもなし寺の鐘

民の背につらき公達

井のもとの桐のそたつを代の力

いますは星に借んわれ鍋

哀たそ酒によはすと月にとへ

唸し返してうたふ詩

徳かくす袂ぬれつゝ擔桶荷ふ

乳ふさ吸子のすへの長かれ

真ふたつになると覺て朝嵐

水棹とらるゝ波の岩角

枝低る檜の木にかよふ杓の音

世離れてすむ庵の淋しき

降くゝて塩籠を干す日並なし

殺しつきさる油むし也

とろほふはいかに読らん役者付

ふたりつれたつ十徳の袖

おもはゆし都の花に笑はれん

柳も見えず拌植の森

此国の大橋をわたりて挨拶の

事あり

元

人〔二十一才〕

士

白

郷

春

人

元

白

士〔二十一ウ〕

春

郷

元

人

士

郷

白〔二十二才〕

元

春

石と木の尽ぬためしや霜の橋

まれに月照る雪垣の中

折すへはとける長緒にひま見えて

時一服をかつき立帰りけり

造り出す酒に名を得る世の聞え

翁の齡知る人やある

添臥て犬の睡れる束ね草

補ひたらぬ山寺の修理

雨晴て笠押上るかゝり船

櫛にもつれてむつかしき髪

芥の香の思ひなしやら鼻に入

明り障子に向ふ白粥

鉢松は助露のしめりに養はれ

秋たつ風に鶯羽うつつ

鎧着て勇む宮居に霧晴し

煎茶尽て月そかたふく

中将某昨日の花のうつり有

児の文よむ樓の糸遊

淡雪に瘦し車の跡付て

晨の風にしらむ大幣

伝ふへき鍛冶に多くの人を撰

柴刈出す山の名を問

轍士

時習

一ろ

乍之(二十二ウ)

元春

以志

旧鶯

志吟

元身

樂助

執筆

士(二十三オ)

之

鶯

習

ろ

志

春

助

身(二十三ウ)

吟

習

方丈に夜寒勞はる小服綿

塵塚求食る鹿の足音

破れ舟の陸にされたる露時雨

油単かるきを詫る夕月

みとり子を抱も悔しき老か袖

墨くろくと卒都婆新らし

敷くゝる鮑けうとく尾をすほめ

朽てや切るゝ衣張の繩

美しう盆に双ふるむすひ飯

輿はつさむ早川の岸

加茂山の峯にまたかる虹の勢

機織音の暮にせはしさ

うつゝなや花めせくと呼つれて

来年もまつ燕の姿

常定興行

車井の音静か也炉の匂ひ

爬はたらさる風の落し葉

短尺の縹をたゝく夕雨に

手つから柿の皮を務けり

月うつる小船を楫に舫はせて

山は紅葉を染分る虹

士

之

春

志

ろ

吟(二十四オ)

習

助

士

ろ

志

之

身

春(二十四ウ)

身

轍士

常定

以志

洞白

元春(二十五オ)

豊子

ウ 居士衣庵の煤にうそよこれ

鳥さしもらす鉗指口おし

うつほとに爪を打かく摺火打

おもひかけなき君か音信

恋瘦に鏡の曇り憎まれす

もたれし柱動くやう也

一こゑをろくにはきかぬ郭公

島の三とせを記に作る秋

雲霧に引まかれたる峯つゝき

月のためにとたてる馬駕

面白や茶釜に花を汲込て

名 雪間くゝを摘ん蒲公

長閑さよ洗足袋干ス 枝折垣

咽のかはけは吹ぬ尺八

待よはり奴僕か夢をゆり起す

豊んつ明つ文の行末

化し世を腹切までの喪に沈み

かはらぬ食は酒はかりなり

急げとも走りまけたる音羽坂

そちが用にはたゝぬ印判

似たかほの貞あらたむる姉弟

火燧一方寂しなつかし

中意

安部

執筆

士

定

志

白

春

子

意

部

定

士

白

志

子

春

部

意

士

定

志

冴る月今仕たる句の居らさる

嘸フタの神カミひゝく風鈴

ウ 物かけにふせる兔の打すくみ

もてくる溶ツルの高きあら磯

折くは尻に敷たる破れ笠

鯨クジラの着込の軽からぬ哉

砂城に仕寄を付る花こゝろ

梅に栄ふる友かそへ見ん

春

脇へちる雫もおしや水あみせ

門松や千里に継ぐ江戸の春

駒つなく松も匂へり山さくら

草の根を蛭くはゆる夕日かな

鶯ウズに明てくやしき障子哉

うくいすに墨する音や御簾の中

雪おれの竹にとゝまるきゝす哉

年くゝや根も残さぬに若根芹

杖とめて若菜摘する司かな

白梅や兎の水くむ寺隣

春雨や茶はしふくとも若所帯

いしすゑは誰か古郷の花樽

白 (二十六ウ)

春

子

意

部

定

士

白 (二十七オ)

福居

可郷

底石

梅水

一慶

祐子

底石

越中

吟雪

宇白 (二十七ウ)

宮腰

友耻

全

蘭仙

かすむ中ひよつと出て行狐哉

石原やねたり起たり河柳

夜に入て桜にどこの風の音

奈良の大仏開眼供養にあひ

奉るいとたうとく有かたさの

あまり

春日野にみな落しけり人の角

菜の花にふらりと下る胡蝶哉

春かせにすはりかねたる雲雀哉

余情かな花に小蝶のみたれ足

雨中鶯

うくひすやうは毛ふくれて雨の音

うくひすや夕日に余るあて仕事

尾のとれて魚にわかるゝ蛙かな

夏

麦は老楓はわかき山辺かな

藤のたな詠の残る小角豆哉

清水せく手は吹ほとに成にけり

ちからなや僕も寐そうに子規

冷しきもの夏の地炉

雷盆すりハチはすさみにもるゝ蚊遣かな

髭剃て床机乞はや杜若

金沢 藕糸

全

青至

夜涼みや目代殿のさかり松  
上臈も下臈も近し瓜島  
富士山に思ひ合せし雲の峯  
夕立や小笹の陰に猫の顔  
灰汁桶の置所なし五月雨

いらはねはたゝ其俣の蟬のから

夕たちのはつれば白し小松はら

ほとゝきすひとり残すか宇津の山

漸榎雀かくれやほとゝきす

押ス舟の足のおもさや雲の峯

おのつから山の調子やかんこ鳥

雅子を門にたゝする蚊遣哉

有ほととの戸をはつしたる涼みかな

秋

鴉風や老の隣の肥竹やふ

雨たれや薄分れて入日影

たくれはさひたる辻の蜻蛉かな

名月に星合遠し舟のうへ

新酒の帘見置て行野哉

大豆畑や後の月さへ暮にけり

さひしさや豆名月の朝ほらけ

片山家粟飯アト熟き月見かな

大野 一鴨軒

底石

金沢 季艸

藕糸「二十九才」

藕糸

枝東

全

梅子

青楊

一徳

小松 塵生

越中 芦葉

金沢 輕舟「二十九才」

四羊

青楊

藕糸

知ト

春紅

任之

満礼

朝ほらけ霧に跡つく紅葉哉  
夜寒さやとかく気のつく窓の破

旅泊

つれもなく座敷も広し秋のくれ

石立にて

秋の風音ふく石のこたえかな

葛の葉にふとりくゝて慕風哉

渋柿のせつかくつはる梢かな

心なや誰か花野の捨火繩

靈棚や去年より見えし水卒都婆

いなつまやさして数あるものと見す

古着買四方の月見る礎かな

朝かほや女の帯を取ちかゑ

白いものうちなる国や越の月

一夜は誹談をやめて酒にかたり

轍をとゝむる事をすゝむれと更に

滞るへきけしきもなければ帰る

さに此句をしたゝめ袖に入て

恥しむる

高く飛ややこゝらにとゝまらず

京にありて束鮒とかたる事

夜昼也しかるに北国に趣とて

声風

北枝

〔三十才〕

波之

雨柳

塵生

夕市

吟雪

秋湖

宇白

祐元

一声〔三十ウ〕

可寿

餞別にあふへき我か餞別

〔かねに行あふ旅や尾花川

たかひに行脚のわかれ誰盃

をおさめて帰る事を待となければ

さかつきを月にさいてそ別れける

都に秋をへて

七夕に黒木をかつく女あり

旅店にて女の酌にむかひて

ほくせよとせめらるたはふ

れて

髭探せこほるゝ露のゑくほあり

名月や淵にひれふる魚の数

うつ音の次第に近し小夜礎

冬

生産神に首途の神楽まいらせふ

初霜にほつれて薫る野菊哉

去ものは日々疎しといへと我友

村沢氏流志は勝れて風雅の人

なりしか未の冬ヒツツ永きわかれと成ぬ

月雪の夕は思ひつゝけて古き反故

なと取出てむかしを思ふ序両吟

の書捨られしを轍翁に見すれば

〔三十一才〕

江戸  
専吟

束鮒

尺艸

作者不知〔三十一ウ〕

梅水

底石

宇白

枝東

〔三十二才〕

此たひの行脚の集にちりは

めて得させんとなれば其心にまかす

はつ雪にめし喰ひ果ぬ童哉

水仙壳の花の新し

香の籠を掛たる斗の我意にして

吹風こはき北国の空

咲そふに成てひしなき山桜

月も臙に見ゆる料理屋

あたゝかに着るや羽織仕立かけ

淋しかりしかはやりむら医者

かひ見しは器量と聞し娘にて

思ひたよつく清水の坂

哥書て匂ふ扇を拾ひけり

金沢の好士烏水か古友をしたふの

殊勝さに流志靈か筆を其俣に残ス」(三十三オ)

終焉

覚悟して死ねは師走も静か也

訊閑居

命なり冬瓜ひとつ冬こもり

小童の牛に鞭うち時雨哉

木からしやとまり定めて鳴鳥

大安自仙居士  
流志

声風

全

満礼

際たちし雪の水藜声の村雀

大雪に寒念仏のしきり哉

山はたゝななめ所や冬の海

池水や鷺かふみわる薄氷

枯野哉拾ひあつめし虫のから

はつ雪やいつれ茶かすの捨所

飛越の石のかたつく枯野哉

飛もせず降ちからなや水あられ

さひしさは澄きる川の時雨哉

水仙に冷酒を呑あしたかな

冬の日やいとゝ鯨の汐疊

歳暮

雉子の尾にせはき師走の湯殿哉

行年をよろこふも又うき世かな

一部の草成て櫻の工みに課

すへきの所に中の越并波より

春かけて雪を分たる華章

愷然としていたゝき見るに僕

去穉荷笠の時京を出るより

この公にこそ向ひ奉りて

なとおもひわたりたるに洛の方  
方にいらせ給へは方角をう

舟路

羅月

季艸

底石」(三十三ウ)

全

道治

祐子

吟雪

梅子

友耻

蘭仙

塵生

青楊」(三十四オ)

しない遺懐のあまり消

そこ残し奉るとて白地なる

一句を書つけゝるを不棄して

一卷に結はれ送らるまことに

遼遠雲路を隔たれと芳し

き心の晨ゆふへにつたひて

深―情こゝにかよふ灯―明月―光

の賢志有かたく覚えて巻の

末なから左に写して拝ス

ことし酉の秋去こと有て

洛にのほり侍り其折しも

束鮒巷の誹士はるかに牽杖

して両越加能の間に遊ぶ

名にあふ良夜も思ふくまなく

山は白根の雪の光を添し

詠めも又我京師豪花の

清光を弄スもいつれか名月の

情なからんやと空行「の音

つれもと一封を残ス我帰郷の

後これをひらき舒巻手に

するの余り同門を促して

「(三十四ウ)

歌仙一卷を次いさゝか彼―是

の残―懐を述て轍士丈人の

吟梧下に投ス

越中今石動と云

所より同井波まで

行程四里

君きけや御里近く秋を三夜

空行違ふ名月の雁

草の露みなそこく〜に間くはりて

旅の用意の錠利けり

人音を聞しる魚に餌を飼ん

蟻のはこひの止る白雨

ウ 日当りの色撰分る初茄子

かたつけかぬる板の間の白

忍ひ路を習へる恋のおほつかな

廉忽にものはいはぬ突出し

立としの明れは膳を居わたし

籜もむ音も春の外繫

燕の巢をかけ替る花の時

僧を隣に人足を見る

傘をすほむる夏に雛よりて

浪化

轍士

其繼

夕鳥

嵐青

嵐秋

仙志】(三十六ウ)

紫風

紫堂

繼

化

青

鳥

志

秋】(三十七オ)

「(三十六オ)

何嗅廻る狗のきたなき

二番渋しほりかゝりし月あかり

小便所なる秋草の色

名  
御大工の木や吹風に実の入りて

毛はさまゝにかはる乗馬

日黒みや紀の国そたち隠れなし

錫杖ふれは米出す町

飼鳩の呼はむらがる庭の中

百合草植直しせはき片陰

あはれさは詰かけてゐる目病共

おなし事いふ湯女の鼻声

きぬゝを取付て泣竹格子

芝居やくらの月に寂しき

見しられぬ秋の土用の空気色

初汐かせのからき獵船

ウ  
ぬるゝほと草屋帽子のおもたくて

筈にしこむも覚え有太刀

養性に座鋪かるなる日の限り

筆勢までを似する甲斐やう

此花や判官殿の鑑かけ

眼鏡のうへもかさす陽炎

堂

風

化

繼

鳥

青

秋

志〔三十七ウ〕

風

堂

繼

化

青

鳥

志

秋〔三十八オ〕

堂

風

化

繼

執筆〔三十八ウ〕

社日を待て帰る燕もまた

秋風にわたり来る厂もおなし旅

況の心ならずやと寄<sub>ニ</sub>轍士<sub>ニ</sub>

来る厂に帰る燕も今一足

常盤の国も吹穂の風

茸おこす岩おそろしく籠漕で

又は

稻つまや跡に見付し蓼の花

ことつてやせめて野分に吹送れ

浪化

紫堂

轍士〔三十九オ〕

甚繼

紫堂

甚繼

紫堂

紫堂

紫堂

元禄七<sub>甲</sub> 戊年孟春

井筒屋庄兵衛板〔三十九ウ〕